

1 研究課題

エスニシティと多文化共生をめぐる人類学的研究：台湾ムスリム・コミュニティの事例から

2 研究成果の概要

本研究の目的は、移民の増加に伴い多民族化する台湾のムスリム・コミュニティとその慈善活動に焦点を当て、現地調査を通じて民族間および宗教間の関係を描き出すことで、民族や宗教を越えた共生のあり方を論じ、理論的モデルとして提示することである。しかし、2019 年に始まる COVID-19 の世界的な流行により、現地調査の実施が困難になった。そのため、本研究助成を 2 年間、延長していただいた。しかし、その後も状況が改善しなかったため、台湾における中国ムスリムの歴史、中国ムスリムとムスリム移民との関係、ムスリム移民の社会団体、台湾におけるウイグル人、中東諸国から見た台湾のあり方に焦点を絞り、文献調査を実施した。その成果は奈良雅史編『多元化する台湾のムスリム・コミュニティ』（上智大学イスラーム研究センター、2021 年）として刊行した。加えて、沖縄のモスクおよび香港系教派の教会で現地調査を実施し、台湾と日本、中国大陆のあいだでの人々の移動とそこでの民族間関係に関する情報を収集した。

3 研究開始当初の背景

台湾では東南アジア諸国や中東アラブ諸国からムスリムの留学生や出稼ぎ労働者を積極的に受け入れており、ムスリム・コミュニティの多民族化が進んできた。特に 1990 年代末より、インドネシアをはじめとする東南アジア諸国から出稼ぎ労働者を多く受け入れており、その傾向はより顕著である。しかし、台湾ムスリムに関する先行研究では、中国大陆に出自を持つ中国ムスリム、インドネシア人ムスリム移民、アラブ人ムスリム移民など個々のエスニック・グループに焦点が当てられてきた。そのため、それらのあいだの関係性やムスリムとしての連帯の実態は必ずしも十分に対象化されて来なかったといえる。

しかし、1990 年代半ばから台湾においては多文化主義政策が打ち出されてきた。そうした背景のもと、土地の所有権をめぐるモスクの立ち退きなどの問題に直面した際に、台湾に暮らすムスリムたちはエスニシティを横断して連帯し、権益を守ろうとしてきた。

また、中国による台湾の国際社会での孤立を目指す外交攻勢に対抗するために、バチカンとの関係強化を目指してきた台湾政府が宗教間対話を促進する中、ムスリム・コミュニティとキリスト教など他宗教とのあいだで慈善活動が展開されるようになってきた。

以上の背景から、台湾ムスリムに関する研究において、これまで個々のエスニシティが強調されてきた台湾ムスリム・コミュニティにおけるエスニシティの重層性と他宗教との関係性に焦点を当てる研究が求められる状況にあったといえる。

4 研究の目的

上記の背景を踏まえ、本研究は移民の増加に伴い多民族化する台湾のムスリム・コミュニティおよびその慈善活動に焦点を当てた現地調査を実施し、そこでの諸エスニック・グループの関係および他宗教との関係を民族誌的に描き出す。加えて、現地調査で得られた民族誌的事例に基づき、民族や宗教を越えた共生のあり方を論じ、理論的モデルとして提示することを目的とした。また、これらの成果を日本文化人類学会の学会誌である *Japanese Review of Cultural Anthropology* に投稿する予定であった。

しかし、上述のように 2019 年以降の COVID-19 パンデミックにより、台湾での現地調査が実施困難となった。そのため、テーマを台湾における中国ムスリムの歴史、中国ムスリムとムスリム移民との関係、ムスリム移民の社会団体、台湾におけるウイグル人、中東諸国から見た台湾のあり方に絞り、文献調査を実施し、その成果を公開することを目指した。その目的は、第一に、台湾のムスリム・コミュニティに焦点を当てた研究の蓄積がまだまだ乏しいという現状を踏まえ、台湾におけるムスリム・コミュニティを理解するうえでの基礎的資料を提示することである。第二に、移民の増加に伴い多民族化する台湾におけるムスリム・コミュニティの現状を複数の視点から明らかにすることである。

5 研究の方法

本研究では当初の目的を達成するために、以下の 3 つの課題を設定した。第一に、台湾ムスリム・コミュニティを構成する主要なアクターである、中国大陆に出自を持つ中国ムスリム、インドネシア人ムスリム移民、アラブ人ムスリム移民、それぞれの視点からムスリム・コミュニティの実態を明らかにする。それを踏まえ、第二に、ムスリム・コミュニティ、およびムスリムたちと協働し慈善活動を実施してきたキリスト教組織、それぞれの視点から慈善活動の展開過程を明らかにする。それらに並行して、エスニシティおよび多文化共生に関する理論的研究を進めることである。本研究では、これらの課題を達成するために、2019 年 8～11 月にかけて断続的に台湾での調査を実施し、2020 年 2～3 月にも現地調査を予定していた。しかし、上述のように COVID-19 の影響により、現地調査を十分に実施することができなくなってしまった。

そこで上記のように目的を変更し、以下の課題を設定した。第一に、先行研究および文献資料の調査を通じて、台湾におけるムスリム・コミュニティを理解するうえでの基礎的資料を提示すること（課題①）。第二に、各プロジェクトメンバーの専門性を活かし、中国語資料、インドネシアの資料、中東諸国の資料の分析を通して、中国ムスリム、インドネシア人ムスリム移民、アラブ人ムスリム移民の視点から、その現状を明らかにすることである（課題②）。第三に、COVID-19 の影響によ

り、台湾での現地調査が長期的に困難となることを想定し、こうした状況下でも本研究プロジェクトを発展させていく可能性を模索するために、東アジア域内でのヒトやモノの動きとそこでの民族や宗教を越えた共生のあり方を明らかにすること（課題③）である。

課題①を達成するために、台湾ムスリムに関する国内外の先行研究を精査するとともに、台湾および中国大陆、インドネシアの行政資料の調査を行った。課題②を達成するために、断片的な民族誌的事例の分析に加えて、各メンバーは台湾の主要なイスラーム団体である中国回教協会が発行する『中国回教』、インドネシアのイスラーム団体に関わるインドネシア語資料、台湾におけるウイグル人の伝記、台湾と中東諸国の外交関係に関する資料の調査を行った。課題③に関しては、台湾との交流が歴史的に盛んであった沖縄県のモスクおよび香港系教派の教会で現地調査を実施した。そこでは、インドネシア人ムスリムたちの東アジア域内での動き、および多様な出自を持ったムスリムたちからなるモスクにおける活動の実態、教会を通じた東アジア域内での人々の動きとそこでの多様な民族の共生のあり方に焦点を当てた。

6 研究成果

本研究では、上述の課題①と課題②の成果として、奈良雅史編『多元化する台湾のムスリム・コミュニティ』（上智大学イスラーム研究センター、2021年）を刊行した。本書は、2部構成で10章からなる。各部はそれぞれ課題①と課題②に対応する。第Ⅰ部では、これまでの東アジアにおけるイスラーム研究において、台湾は中国の一部と位置づけられる傾向にあり、台湾のムスリム・コミュニティに焦点を当てた研究の蓄積が乏しい現状を踏まえ、台湾におけるムスリム・コミュニティを理解するうえでの基礎的資料を提示した。具体的には、台湾における宗教の概要（1章、藤野）、イスラームの歴史（2章、木村）。モスクの概要（3章、奈良）、外国人ムスリムの概要（4章、西川）、中華系ムスリムと外国人ムスリムの関係（5章、高尾）である。加えて、巻末に「台湾ムスリム研究文献目録」を付した。

課題②に対応する第Ⅱ部では、第Ⅰ部を踏まえて、台湾におけるムスリム・コミュニティの現状について、複数のアクターの視点から論じた。6章では、台湾に暮らす中国ムスリムたちが、中華民国の「台湾化」プロセスにおける文化的多様性をめぐる言説の変化にいかに対応してきたのかが論じられる（木村）。7章は、2000年代以降に急増した外国人ムスリムたちと中国ムスリムたちとの関係性の変化に焦点を当て、台湾におけるムスリム・コミュニティの多元化がいかなるプロセスなのかを論じる（奈良）。続く8章では、台湾で活動するインドネシアのイスラーム社会団体に焦点を当て、その活動がインドネシア人ムスリムたちの生活において果たしてきた役割が明らかにされる（西川）。9章は、台湾におけるウイグル人の自伝を分析することで、複数のグローバリゼーションとして彼らのあり方を論じ、漢人系のムスリムには還元しえない、台湾におけるムスリム・コミュニティの多様性を明らかにする（藤野）。10章では、台湾と中東諸国との外交関係に焦点を当て、ここまでの章とは対照的に、イスラーム世界から見た台湾のあり方が論じられる（高尾）。

課題③を達成するために実施した沖縄県での現地調査では、インドネシア人漁業従事者および技能実習生が増加する一方で、モスクの活動では周縁的な位置づけにあるという台湾と類似した状況が見られた一方で、インドネシア人漁業従事者たちが東アジア域内を活発に移動している現状も明らかになった。また、教会における調査では、聖職者が台湾、中国大陆、香港、韓国、日本を含む東アジア域内で活発に交流し、宗教的ネットワークが作られつつある状況およびそのネットワークを利用して信徒たちが移動を活発化させている状況が明らかになった。これらの調査結果は断片的なものに留まるが、本研究課題を東アジアという地域に拡大して今後発展させていく端緒となりうるものである。

7 東アジア研究および文化人類学にとっての学術的意義

本研究で得られた成果には、以下の 2 点において東アジア研究および文化人類学にとっての学術的意義があるといえる。

第一に、台湾におけるムスリム・コミュニティを理解するうえでの基礎的資料を提示したことである。東アジアにおけるイスラーム研究の中で、台湾は中国の一部と位置づけられ、ムスリム移民の増加に伴い、その重要性が高まっているにもかかわらず、必ずしも十分に扱われてこなかった。そのため、本研究が提示した台湾のムスリム・コミュニティに関する各種データは東アジアを対象としたイスラーム研究に貢献しうるものである。

第二に、台湾における多様な出自を持つムスリムたちの共生のあり方に関する視座を提示したことである。先行研究において、台湾ムスリム・コミュニティは個々のエスニック・グループに焦点が当てられ、多様な出自を持つムスリムから成るコミュニティのあり方やそこでの関係性は等閑視される傾向にあった。COVID-19 の影響により現地調査が困難になったことで十分に議論が尽くされていない部分もあるが、本研究は異なる出自を持つムスリムそれぞれの視点から台湾におけるムスリム・コミュニティのあり方を多声的に描き出した点で、先行研究の枠組みを拡大する意義を有する。これは様々な産業で東南アジアなどからの外国人労働者への依存度を高める東アジア地域を理解するうえでも有用なものになりうる。